
14121

AQUARIUS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

14121

【Nコード】

N8895P

【作者名】

AQUARIUS

【あらすじ】

中学生の健太は、眠りにつくつと夢の中で旅をする。

それはとてもリアルな夢で、現実に経験したようなことを二次体験しているようだ。

国も時代も違う夢の中で、健太は自分や現実世界での周囲の人々のルーツを知る。

第一章 夢の始まり

第一章 夢の始まり

今夜の夢はどんな夢か。

昨日は、空を飛んでいる夢をみた。

一昨日は、ドイツにありそうな深い森の中をひたすら歩いていると、目の前に大きなケーキの家が現れて、その家の前に立て札があり、子供のような雑な字で書いてあった。

“どうぞお食べください”

「これは夢か」

「はたまた幻か」

僕は、汚れるといけないからとユニクロで買ってもらった上着を脱いで、こんな状況でおかしいかもしれないけど丁寧に畳んで、十歳の子が乗る自転車の大きさくらいある横になった木の上に乗せると、ダッシュで走って行ってバーンと生クリームがたっぷり塗ってある家の壁に大の字になって抱きついた。

「うまい。これミストのエンゼルフレンチよりおいしいかも」

「あーあれは」

家の中には、シヨコラで出来た机と椅子がおいてあるではないか。僕は、水あめで出来た窓を開けて、ぎりぎり通れるくらいの幅のある窓をすり抜けると、超巨大なシヨコラにかぶりついた。

そのときだ！

かすかに声がする。

何だろう？

いや、誰だろう？

あ、この声・・・もしか・・・。

「おきなさーい。健太、おきなさーい。」

気がつくどベットの所で、枕の端を思いつきり噛み付いて目が覚めた。顔の前には、母親が大きな体を近づけて、朝から大きな声で僕の名前を連呼している。朝からこんなに大きな声を出せるのに、学生時代は華道部だったらしいから、そのギャップに笑ってしまう。華道部時代の母は、今の姿が嘘かと思えてしまうほど、細くかつ可愛らしい顔立ちをしていて、学校でもフアンクラブが出来てたっていうから、驚きだ。

この話しは、僕が小さいときから何かと本人が言ういわゆる鉄板ネタと呼ばれるやつなんだけど、学生時代に知り合った父からも同じことを聞いていたし、父が仕事に疲れて家でビールを呑みながらしみじみ“あのときのみっちゃんは可愛かったなあ”っていうもんだから、本当に学生時代の母は可愛かったと思わせざる得なかったが、半信半疑でもあった。去年のお正月に、学生時代の同級生とかいうご夫婦が近所に引っ越してきたからと、わざわざ挨拶に来てくれた。そのとき、旦那さんの方が酔っ払って“みっちゃんは、随分貫禄ついてきたな”なんて言って笑かしてた。他人までも昔の母のことをよく言うとなると、僕の中では神話に近い類の話しだと思っていたことも現実のものとなる。

「早く起きなさい！」

顔を目の前にまで近づけられるのが最近嫌でたまらなくなった。そのことを“思春期真っ只中だからそういうのって嫌じゃん”って友達でバスケット部の浩一に言うと、思春期とか関係ないってあっさり否定された。

母がカーテンを開けていったから、読み終わったジャンプと学校から持って帰ってきたプリント、脱ぎ捨てたジャージが散乱している部屋に神々しい光が降り注ぐ。足の踏み場もない部屋だけど、自分にしかわからない足の踏み場を窓まで進む。

「うーうーあーあー」

手を横に広げて、思いっきり神々しい光を体に取り入れる。

光合成している植物みたいに、光エネルギーを科学エネルギーに変換する貴重な時間で、この時間が雨とか曇りで出来ないときは、一日中どうしようもない倦怠感に襲われる。このことも浩一に言ったらやっぱりあっさりと否定された。笑って誤魔化したけど、腹の中では、このことだけは否定されても譲れないものがある。だって、光合成していると光エネルギーが額から入ってじわじわと全身に広がるのがわかる。それで、例えば痛いところがあったとすると、軽い打ち身程度ならすぐに治ってしまう。一人部屋を与えられたときから、この日課は欠かさずやっているから、浩一が何て言おうと光エネルギー不足⇨倦怠感が僕の中では問答無用に成立してしまう。

関係ないことだけど、昨日学校から帰ってきて何気なくテレビをつけたら、NHKのニュースで国会の何とか委員会の様子を放送していた。強行採決とか言って与党が野党の反対を押し切って無理やり採決をするっていう暴挙らしいんだけど、父に聞いたら昔から頻繁に行われてきた常套手段だって聞いて、いい年下した大人も子供ら

しいことするんだなって思った。僕はもう中学生だからそんな子供っぽいことはしないと入学式の日、それまでとは違う校庭の広さと、教室に習字の張り紙やオルガン何かもなく、どこか大人っぽさを感じた。それ以来、子供っぽいことは避けるようにしている。実際、入学式の次の日から、制服のズボンを腰で履くように少しずらして先輩の真似から入った。だから強行採決なんて自分の意見を押し通そうとする国会議員のおじさんたちのやり方は子供っぽくみえたし、昔からの常套手段だなんて知ったときは飽きた。そして僕の方が大人だと思えてきて、少し偉ぶって寝たらケーキの家なんて子供の象徴のような夢をみたから、まだまだ僕も子供なんだって一夜にして実感した。

今日は光合成の時間がいつもより三分くらい長めで、額から入ってくる光の量もいつもより多めに感じたから、腰の辺りが少し暖かくなってホッカイロがいらなくなるくらい。最近は、いつも玄関の扉を開けると冷たい風がブワッと直撃してきて、たいてい一度閉めて気合を入れなおしてから外に出るようにしている。うちは十五階建てのマンションの十五階に住るから年がら年中強風に襲われる。晴れた日は、正面に大きな富士山が見える最高のロケーションだから、少しくらい風が強くても我慢できる。富士山には、特別思い入れはなかったけど、この前初めて日本一の富士山に心が揺れた。雲ひとつない快晴の空に頂上付近にほどよく雪が積もって、浮世絵に出てくるようなきれいな富士山を初めてみて、何か特別な思いが僕の中で生まれたのがわかった。今日もあの時と同じようなきれいな富士山だったから、きつといいことがあるだろうな。

三時間目が終わったときだった。

学級委員の小林さんがやってきて、三者面談の申込用紙を提出するように言ってきたんだけど、すっかり忘れてて、その申込書は今自

分の部屋の机の上に置いてある。仕方ない素直に小林さんにそのことを伝えるとガラリと顔つきが変わって、怒り出した。無理もない。だって昨日もその前の日も同じことを言ったんだから。よく我慢してたもんだと他人事のように関心した。だけど、その関心も段々薄れてきた。あの温和な学級委員の小林さんが顔を真っ赤にしたあげく、机を蹴り飛ばしてきた。

そ、そこまでする・・・。

あまりの豹変振りにビックリした。

だって、言葉使いもすごい乱雑で、表すなら試合後の興奮したプロレスラーだよ。

だって、語尾に「オラっ」なんてつける女子いる？

僕も周りのクラスメイトも、小林さんの豹変振りに引きに引きまくり、彼女の口から最後の言葉が出るまでずっと置物のように立ち尽くすしかなかった。

「ゲスガ」

ゲスガ・・・何だろう。ゲスガって。

周りの友人に確認したが、みんなその言葉だけはうまく聞き取れておらず、陸上部の三上に至っては、“そんなこと言ったか？”なんていう始末だった。

ともあれ小林さんは、その言葉を残して教室を血相変えて出ていってしまい、教室には何とも不思議な雰囲気だけが残った。

うちの学校は、県内でも珍しい給食が出る中学で、聞けばうちの市ともう一つ、何市かは忘れたがその二つの市しか県内で給食が出る中学校はないらしい。殆どの市の中学校がみんなお弁当を買ってくるか、持ってくるようになってるみたいで、どうしてうちの市には

給食があるか・・・それは僕にはわからなかった。給食の時間、うちの担任に隣のクラスの坂本先生が話しかけてきた。次の時間が学年集会で体育館に集まり何やら話し合いをするんだとかで、スピーカーを出すかどうかを聞きにきていた。うちの担任は、別にどっちでもいいんじゃないの？なんていう顔をしながらも、“スピーカーがあれば楽よね”なんて言うもんだから、僕は少し可笑しかった。坂本先生は、帰り際に、去年一年間担任を持った男子生徒、野球部の長谷川くんの給食を堂々と盗んで帰った。長谷川くんは、イラっともせずにそのまま女子との会話を楽しんでいる。そういえば、長谷川くんは、大柄の坂本先生の大柄な態度と子供っぽい性格を、大人とは思えないほどの知能の低さと表現して毛嫌いしていた。

野球部の坂本くんは、体つきは然程大きくはないがキャッチャーをやっていて、運動神経は万端で成績も優秀だし、ルックスも男っぽい顔だけど目鼻立ちがはっきりしているから女子からもモテた。ついでにPTAのお母さんたちからも人気があった。

長谷川くんは、自分とはたまに話すけど、ほかのモテ男とは違って偉そうに振舞わず、話すところかなり謙虚なところがある。言葉使いも丁寧なところもあるし、一番好きなのは、自分を立ててくるところ。明らかに僕の方がいけてないのに、僕に遠慮してくれる。そこが僕は大好きだ。彼はかっこいいと憧れていた。そんな長谷川くんだからこそ、坂本先生のような子供をそのまま大人にして先生にしたような人は許せないだろうと思う。

午後、体育館に移動すると、三時間目終了後に血相をかけて怒り狂っていた小林さんが先頭に立って整列をさせていた。その後ろでスピーカーを机の上に乗せて何やらいじっているのが、坂本先生だった。

キーン

スピーカーがハウリングする。

僕はこの音が好きだ。なぜなのかわからないけど、この音が好きだ。ほとんどの人がハウリングが起きると、耳を塞ぐか、顔をクシャクシャに歪めますが、僕は一人だけ笑顔で楽しんだ。

坂本先生は、体育の先生だから機械が苦手なのかもしれない。社会科の瀬川先生がトコトコとやってきて、坂本先生からスピーカーのマイクを奪った。スピーカーの何かをいじっているのは、こちらから確認できたが、何をしたまでかはよくわからなかった。すると、瀬川先生は、こちら側を向き、独特の低い声でマイクテストを始めた。

「テスト・・・テスト テスト テスト」

その場にいたほぼ全員が笑ったが、運悪く先生の正面にいたバスケット部で四組の遠藤が先生の怒りに触れて頭を殴られた。僕は大人げないと思ったが、あまり性格がいいとは思えない遠藤にはあれくらいした方がいいのかもしれないと思った。

学年集会の内容は、来る修学旅行での注意点と整列の練習だった。

「整列の練習なんて必要なのか？」

「何言ってるんだよ。必要だよ。素早い移動は、生死に関わる重要な問題だぞ。基本だろ。」

学ランの第一ボタンの隙間から薄っすらと迷彩柄のTシャツの襟が見え隠れてしている。柔道部の小林達也は、父親が航空自衛隊の航空システム通信隊に所属している隊員で、自分も将来は自衛隊に入

って飛行機のパイロットになりたいという壮大な夢を持っているのだが、その夢を語るときの彼の目はかなり血走り、自国守ろうという志を持った勇敢な若者の集まりと兵隊さんを表現していた僕の祖父が語ったそれとは大きく違っている。単なるミリタリーオタクだ。彼のようなただのミリタリーオタクにこの日本を守ってもらおうのかと思うと少し嫌な気分にもったが、そのことを父に言うと、“どんな人であれ、自分たちの代わりに血を流してこの国を守る役を志願した人たちなんだ。有難いって思わなきゃ。今は、まだただのオタクでも、入隊したら最初の二日くらいで興味では続かないことを悟ると思うよ。命がけなんだから。” って言ってたから、僕はこの言葉を信じようと思った。だけでも修学旅行の整列が死活問題に繋がるかは首をかしげてしまう。まあ、ミリタリーオタクの考えることだからと僕は反論しなかった。

体育館を引き上げるとき、保健室の清川先生と一緒にになった。先生は、修学旅行に参加してくれるそうで、今日の集会にも顔を出していた。いつもは具合が悪いときにしか、保健室にいかないし、顔を合わせる時は大概こちら側は苦しんでいるときだから、清川先生も苦い顔をして僕らを対応しているもんで、彼女のまともな顔をみたことがなかった。しかし、今日は満面の笑みを出している。何か嬉しいことでもあったのかと聞いてみると、京都に行くのは本当に久しぶりで、もう十数年は行ってないらしい。それでウキウキしてるのだそうだ。

おばさんでもウキウキするんだね。

僕は、決して言えないことを心の奥底で言ってみた。その後、彼女と目が会ったときには僕の聞こえるはずのない声が聞こえたのかと思っ少し驚いた。

放課後、校庭ではいろんな部活が練習を始めていた。

部活に入っていない僕にとって、部活の練習がどんなものかよくわからない。

友だちには、部活をやっている連中がたくさんいる。陸上部、サッカー部、野球部、バスケット部、剣道部、それから新設されたラグビー部まで、彼らは口々に練習の厳しさを愚痴る。というか、自慢する。辛いけど、楽しいらしい。どのくらい辛いかを“うちの部活は”なんて楽しそうに話すもんだから、全員性癖が“M”なのかと真剣に思った。

でもどうやら違うらしい。だけど、僕にはその、彼らの感覚がうまく理解できていない。

“そんなに練習が辛いなら。吐くほどの辛さなら、無理して続ける必要ないじゃん”

運動知らずの僕には、スポーツマンの美学が本当にわからない。

野球部の粗野が後ろから抱き着いてかまってくる。

これ、ほぼ毎日行われる儀式のようなもので、正直言って僕は嫌で仕方がない。野球部の練習用のユニフォームって真っ白で汚れがかなり目立つ、毎日スライディングとかするくせに洗濯は週に一度だけなんて綺麗好きの僕には考えられないことで、自他共に認める潔癖症な僕には旅先で入った公衆トイレが異臭漂う殺人的な不衛生極まりないときと同じくらい嫌なものなのだ。

しかも子供の頃からの付き合いの粗野は、僕が潔癖症であることはずーっと前から知っている。にも関わらず僕を見つけると必ずやる。無礼極まりない。粗野と僕は、幼馴染だから、中一の夏までは下の名前で呼び合っていた。だけど、あの夏に僕は彼を苗字で呼ぶようにした。どうしても一線を引きたかったから。僕の潔癖症を知って

いるのに、あの暴挙・・・ひどいでしょ。粗野は、僕が苗字で呼ぶようになってから、最初こそは“どうした？”って顔をしていたけど、最初だけで、僕の拒否反応が膨れ上がるにつれ、粗野の暴挙は段々激しさを増していった。もし僕が人に嫌なものを嫌と言えない性格じゃなかったら、立派なイジメなわけだ。

そういえば一年生の男の子がイジメを苦に登校拒否になっていたけど、友だちが毎日家を訪ねて励ましたら学校に再び通うようになったんだけど、通い始めて一週間経ったときに、教師の誰かがその子に“長期休暇は楽しかった？”なんて言ったらしくて再び登校拒否になったっていう噂を聞いた。そんな教師がこの学校にいるなんてはらわた煮え返るくらい腹が立ったけど、もう卒業した今高校二年生の知り合いの先輩には、“うちの学校におかしな先生が一人もいないと思っていたお前がおかしいよ”って言われた。先輩の学年でも似たようなことを言う教師がいたらしくて、僕は幻滅した。たぶんその教師は、一年生にひどい事をいった教師と同一人物だと思う。制裁を加えなければならぬと心の底で誰かが言うのがわかった。

マンションの入り口に睦^{まちと}が座っている。

睦は同じマンションに住む小学生で僕の家隣の隣に住んでいる。弟のようなやつだ。

僕は近づいていって話しかけた。

「何してんだよ？」

「別に・・・」

「あっそ」

あっけなくマンションに入って行く僕に慌てた睦は、マンションの壁に向かって蹴っていたサッカーボールを抱えると僕の後ろを着いてきた。エレベーターに乗ると、聞いてもないのに話始めた。

「学校でシカトされてる」

「誰が？」

「俺だよ。」

声を荒げる睦に僕は少しイラつとしたけど、睦より先に行く少し大人として我慢した。

「もう一週間になるんだ。先週学校にいったら、クラスのみんなが俺をシカトするんだ。誰も俺と話そうとしない。声をかけても知らないふりをする。頭にきてクラスメイトの一人を殴ろうとしたら、みんな一斉に俺を責める。」

そこまで言うと睦は泣いて僕にしがみついてきた。

普段は腹が立つくらい生意気で少々乱暴なガキ大将気質な奴だけど、今日は違った。前にも同じようなことがあったけど、そのときは睦のお父さんに豪く（えらく）怒られて家を追い出されたときに、うちの母が心配して、一晚預かった。その夜に、僕の部屋で僕に抱きついて大泣きした。中一で弟の居ない僕には衝撃的で、どうしていいのかわからずただ泣き止むのを待っていた。そのときのことがあるから、今回は少々気持ちに余裕が持てた。だけど、どうしていいのかはわからなくて、とりあえず家まで送っていくと、丁度睦のお母さんが買い物に行くところで、睦も気分転換に買い物に行くと行って一緒に歩いて行った。

睦は、自分勝手なところがある。自分の意見を押し通す自己中心的な物の考え方で、それでいて妙に冷めているから、子供っぽい容姿とは違って可愛げのないと周囲から誤解されている。

ご両親からも

“ 睦の考えてることはわからない ”
“ 自分の息子だけど距離を感じる ”

何て言われてるくらいだから。

ここだけの話し、睦は随分前から両親との間に溝を感じていて、
て言ってた。

別にケンカしたわけでもないけど、どことなく距離を感じていて、
本当の気持ちを話すのは、怖いそうだ。

それで僕を見つけては、愚痴をたくさん言ってくるみたい。
面倒なことだ。こっちにしたら。

でもどうなんだろう。

自分の両親に、別に何かヒドイことをされたわけでもないのに、心
を開けないって。

何かどっか悪いのかな？

そんなことは、どうでもいいか。

今日は、火曜日だから我が家はこの時間、僕だけになる。

火曜日と木曜日、金曜日は母がパートに出ている、夕方まで戻らな
い。この時間は、僕にとって気持ちが一番安らぐ時間で、何をして
も文句を言われない最高の瞬間で、思春期真っ只中の中学生が考え
る最高の至福を全力で味わう。最高の至福を全力で味わった後は、
深い深い谷底に落ちるように眠りにつく。この生活を一年生の頃か
ら毎週続けている。

そして今日も、至福のあとは、深い谷底に落ちるように、いつの間
にか眠りに・・・。

第二章 バベルの塔とバビロンの空中庭園の街で（前書き）

夢を旅する旅人、健太。

今日の旅先は、古代イラク（現在のバグダット近辺）に栄えたという新バビロニア王国。

さて、今宵の内容は？

第二章 バベルの塔とバビロンの空中庭園の街で

青い大きな門が目の前にある。

それはとても大きなもので、その色も深海の底のような色をしている。

とりあえず門を潜ってみることにした。

土色をした家らしき低い高さの建物があちらこちらにあり、道幅もそれなりに広い。

ここはどうやら街らしい。

だけど、人は・・・今のところいない。見当たらない。

何かが走り去るのが目に入ってきた。ここから八十メートル先の左側の路地から白い影が飛び出てきて、右側の路地へと消えた。それは一瞬であったけど、不思議とスローモーションにも感じられた。それから数秒後に、今度は大人の影が同じように左から右へと消えていった。妙に気になったからそこへ行こうと思ったら、もう既にその両方の路地の大体真ん中らへんに立っていた。テレポーテーションのような感覚で一瞬にして移動した。テレポーテーションはしたことなかったけど、もし出来たとしたら、こんな具合なんだろうなと思った。右側の路地を覗き込むと、遠くの方で大人が倒れているのが見えたから、思い切って近づいてみることにした。三十代くらいの男の人で、髪の毛は少し薄くて、筋肉もムキムキとまで言わないけど、ある程度ついていて、きつとこの人に殴られたら相当なダメージを食らうんだろうなと思うほどの二の腕をしている。その男性がゆっくり立ち上がって足で土を蹴り飛ばして、持っていた布切れのようなものを地面に叩きつけるような仕草をした。実際には叩きつけてはいない。

「これでもう三回目だ。あのクソガキめ。今度会ったら捕まえて売

り飛ばしやる。」

怒りを顕にした鋭い目がそれまでの気持ちを一っぺんに変える。

“この人、たぶん相当やばい人なんだ。喧嘩に慣れてるとかそういう次元の話ではない。”

一瞬にして恐怖を感じ身震いすら覚えた。動きが奪われ、その男が行き去るのをただ息を殺して待つしかなかった。だけど、驚くことにその男は、僕に気がついていないようだった。

先ほどとは違う風景が目の前に広がった。きれいに整った石段の上に立っている自分の足元には、一メートルほどの人口で作られた小川が優雅に流れている。水が透き通っていてとてもきれいで、その流れを目で追うと沢山の植物がいたるところに生い茂っていて、“ここは楽園なのか？”・・・。

薄い風が右の頬を撫でる。風の道に目をやると、今自分が立っている場所が高台の上にあることがようやく理解できた。目の前には、升目上に町並みが広がっているが、目視でだいたい一キロ弱のところに塀があり、四角形に街は囲まれているようだ。今自分がいるところは、街の中心部の何か重要な建物のようだということが、一瞬に理解できた。僕は、この目の前に広がっている小川の流れを追いかけるように歩いてみることにした。頭の上を赤、黄の色をした大小様々な植物に囲まれ、茎の緑は、深く力強く、そして繊細なものを持っている。園芸には弱いけど、その美しさだけは、何となく理解できた。白っぽい服を着て頭にワンポイントお花を乗せた女性と何人かすれ違ったが、やっぱり僕には気がついていないようで、背の高いモデルのような顔立ちの顔色は少し日焼けしているようにも見えたけど、彼女は男性を連れて小川の流れに逆らって僕の方へ行く方向とは逆側に歩いていったけど、すれ違うときに、微かに僕の腕に当たったけど、何もなかったように、彼女にとっては本当に何もなかったのかもしれないけど、男性の腕を引っ張って幸せそうに歩

いて行った。

“ やっぱり僕のこととは、わからないんだ。”

小川が左側に曲がったので、僕もそれに従った。

すると、目の前に異様なものが飛び込んできた。まるでバームクーヘンか、ロールケーキを縦にして地面に置いたような、何とも異様なものだ。

“ あれは・・・なんなんだ？”

横浜マリントワーや東京タワーよりも高いのは間違いないと思う。みなとみらいのランドマークタワーよりは低いだろうけど、ここから見るととてもなく高い建物で幅もある。何をするものなんだろう。ここからだ、大きさは嫌でもわかるけど、人影とか何か象徴的なものまで見えないから、よくわからない。でもとにかくすごいとしか言えない。

何か僕の腕に当たって、ドサーっと大きな音を立てて崩れ落ちた。ビックリして慌てて手を貸した。小学生くらいの少年だった。その少年は、差し出した僕の手をぎゅっと握って立ち上がり、驚いた顔をして僕の顔を見上げた。手はまだ握り合ったまま。

「僕のこと・・・見える？」

「・・・見えるよ。もちろん。」

「（何でこの子には見えてるんだ？今までの人たちにも見えてたのか？）あの・・・えっと・・・君は？」

「エール」

遠くの方で若い男の声がする。少年は、僕の腕を振り払おうとして、ぶんぶん振ったが、そうやられるとつい力が入ってしまって、ぎゅっと手を握り締めてしまった。そのうちに若い男がやってきて、少年を後ろから抱きかかえた。少年は、足をバタバタしながら、しきりに“許して、ごめん”を繰り返している。そのうちに若い男は、少年を自分を軸にしてぐるぐると回しだした。三回くらい回したところで、“どうだ。参ったか？”と少年を抱えたまま腰を突いた。

「参ったよ。ごめん、セフィル。もうしないから」

「もうその言葉聞き飽きた。何回同じことを言うつもりだ。このくそガキ。」

「ああ、だから今度は本当だよ。もうしない。ほんとだって。家族の言うことはちゃんと聞くよ。だから許してー」

「ほんとだな？」

「ほんとだよ。」

「ほんとに、ほんとだな？」

「ほんとに、ほんとだよ。」

「あの、その変で許してあげてください。何をしたか知りませんが、彼も反省してるようですし。」

堪らずセフィルという名の若い男に僕は言った。

セフィルは、少年を腕から離れた。

「もう本当にしないから・・本当だよ。」

「わかった。その言葉信じるぞ。」

「ありがとう。セフィル。」

「よかったね。わかってもらえて。それで何をしたの？」

僕は少年に語りかけた。

「全く仕事サボってほっつき歩いて、どうせまた食べ物でも盗み食いついてたんだろ？」

「・・・うん。」

「ご飯ならちゃんと食べさせてるだろ。俺より食べてて・・・。」

「盗み食い？そんなことしてるの？ダメだよ。そんなことじゃ。僕は少年の肩をポンと叩いて諭した。

「おなか空いてたんだ。最近、食べても食べてもお腹空いちやって。」

「それなら家に帰って何か食べればいいだろ。」

「家はいやだよ。セフィルがいない家には帰りたくない。」

「・・・。」

「どうして一人じゃ帰りたくないの？僕なんて家に帰って一人だとやりたいことできるから嬉しくてたまらないのに」
少年の顔を覗き込んで聞いた。

「アブルが・・・また・・・俺もういやだあ。」

「エル・・・。」

“アブル？”

「君の名前は“エル”っていうんだね。」

「もう帰ろう。遅くなったらまずい。」

エルは、セフィルに抱きついて彼の腰の辺りで両手を組みギュッと握り締めた。

セフィルのお腹らへんに左耳を押し付けて目を瞑っている。

「心臓の音・・・聞こえる。」

セフィルは、エルをギュッと抱きしめると、彼の手を優しく握って建物の中に引っ張っていった。

「あ、ちょっと待って。ここ何処なんですか？」

僕は、セフィルの前に立って聞いたが、セフィルは僕の体を通り抜けて歩いていってしまった。

薄暗い建物の中、社会科の教科書に出ていた古代ギリシアの神殿のような造りをした、少しひんやりとした空間に、僕の息遣いだけが静かに響いた。

「ちょっと待て。今まで見えてなかったのか。いや、待てよ。だってさっき少年と話したじゃん。あのときエルは答えてたよ。俺のこゝと“見える”って言ってたじゃん。何でいきなりこうなるのよ。セフィルとかいう人が俺のこと知ってて知らないふりしたんじゃないのか。そうだ。きっとそうだ。だってこの服装してるから怪しまれたんだ。だってこれ、学校の制服だもん。やっぱり学ランは場違いだよな。」

・・・んなはずないか・・・。

だって・・・。

さっき確かに俺の体・・・通り抜けたもん。」

額に暖かいものを感じる。まるで、日課の日光浴、僕の光合成の時間によって気持ちがいい。だけど、少し違うのは、光合成は光を受け入れているうちに体の隅々までエネルギーが溜まるのがよくわかる。しかし、今感じているのは暖かいけど、エネルギーがいつものそれと全然違って薄い気がする。目をあけてみた。暖かいものを感じる方向に何があるのか。

家だった。

でも日本家屋ではなくて、粘土のような素材で出来ているようにも思えた。触ってみると頑丈だけど、ひんやりしてて、日本のように暖かさは感じられなかった。光は、この家から漏れていた。中を覗くと、藁の上でエルが何かを作っていて、そのすぐ横で立ちながらセフィルが何やらガサガサとしていた。家の中は、質素で家具はなく、あるのは藁で出来た布団のようなものと、お皿と簡単なテーブルのようなものだけ。壁に少し窪みがあって、そこにランプが置いてあり、そこから灯りをとっている。ランプの数は、かなり多かった。

奥から声がエルを呼ぶ声とする。

エルは、その声が聞こえていないようで、藁の上に何かをしている。

また声とする。

それでもエルは、藁の上で、今度は仰向けになってそれをしている。今度は大きな声をした。同じようにエルの名前を呼んでいる。

エルは、耳を押さえて背中を向けた。

すると、奥から髭を喉仏の高さまで伸ばした老人が薄っすら笑みを浮かべながら、ゆらゆら歩いてくる。赤い灯りの中、奥から現れた老人の影が不気味に感じて、僕は壁に隠れた。壁越しにそっと中を見てみると、エルの脇に腰をかけて、エルに話しかけている。

「今日は、ご馳走だった。」

「・・・」

「たまに豪勢な食べ物を食べると・・・なあ、エル。どうだ？元気になるだろ？」

「・・・」

「わしはなあ、十歳も若返った気になる。ほら、みてみる。いつもは老いたこの腕も、鍋を握るのにも苦勞するこの手も、今晚のご馳走のおかげか、ほれ、すっかり力を取り戻しておる。」

エルは、黙って背をむけている。足を九の字にまげて、手は胸の真ん中で交差して、目はぎゅっと瞑っている。老人は、エルの肩に手をかけ、エルの顔の前まで自分の顔を近づけて言う。

「年老いて何も出来ぬ身、何も楽しみはないとただ次の世に行くのを待つだけ。巷の老人は、そう言うて一日中地べたに座り込んで、何を考えておるのかのお。わしは、そんな人生は好かん。そうじゃろう。詰まらんだろう。じゃから、わしは、わしの楽しみを見つけるために、街へ出た。するとな、どこからか連れてこられたばかりの子に出会った。わしは、その子を見たときに決めたんじゃよ。わしが死ぬ瞬間まで、そばにおいて、わしが面倒をみてやろうとな。それまでは、セフィルと二人きり、セフィルのやつは、わしの言うことは聞くが、体が大きいからなあ。・・・なあ、エルよ。わしは、その子をそばにおいておけば、余生を楽しめると思うたんじゃよ。」

老人は、長く、おそろくはすごい臭い舌をエルの頬に当てて、ゆーっくりと舐めた。舌先から唾が垂れている。僕は、吐き気がするのを必死になって堪えて、様子を見た。何かあったらすぐにも逃げ準備はしながら。

「わしはなあ・・体がまだ幼い・・そう、立派な体格になっていない、柔らかい手ごたえの真っ白な肌を持った子がたまらなく好きなんじゃよ、エル。・・お前は・・わしの物じゃ。わしが立派に育ててやるから・・有難く受け入れろよ・・。」

エルの上に跨り、彼の鎖骨らへんから首筋にかけてあの気持ちの悪い舌を這わせて、皺しわのある両手で彼の腰の辺りを引き寄せるようにして、その光景そのものが悪魔のようだった。

段々とエルの泣き声が聞こえてくる。逃げようにも逃げられない態勢の中、エルは必死に泣き続け、老人のそれが終わりを迎えるときまで、ずっと助けを求めた。

しかし、誰も助けに入るものはいなかった。セフィルは、いつの間にか奥に引っ込み、僕は一部始終を見ていたが、彼を助けようにも動けずにいたし、一番重要なのは、僕が見えない存在になっているということ。

老人は、事が終わるとぐったりしたエルの体を、じつくりと眺めると、あの醜い舌でゆっくりと嘗め回した後に奥へと消えていった。しばらくして、セフィルが毛布を持って現れると、エルの横に寝転がり毛布をエルに被せると、優しく抱きかかえて眠りについた。

あのきれいな樂園のような場所の一角で、セフィルは空を見つめながら考え事をしていた。僕は、彼のすぐ後ろに腰掛けて彼のことを見つめていた。

“毎晩、エルを助けられないでいる。俺は・・どうすればいいんだ。アブルには助けられた。親に死なれて、食べ物も住むところもなくなった俺を助けてくれた恩がある。アブルの手からエルを守るには俺

はどうすればいいんだ。”

セフィルの葛藤を僕は聞き取れ、かつ手に取るように理解することができた。

エルをアブルから守るには、セフィルがアブルをどうにかするしかないけど、アブルには恩があるセフィルはそれを躊躇ってしまふ。弟のように自分を慕うエルを守りたいが、自分には毎晩アブルの事が終わるのを待って、ただエルの横に寝て、泣きじゃくる彼をそっと抱きしめるしかない。エルからの信頼も守りたく、アブルへの恩も裏切りたくない、自分の立場を考えて苦しむセフィルは、その状況から逃げ出したくてたまらなかった。

エルは、セフィルの優しさをよく知っている。身寄りのない自分を引き取ったアブルよりも、エルのことを理解し、エルの全てをわかっているようなセフィルのエルに対する態度がエルにセフィルを心から信頼させる理由でもあった。エルにとっては、年齢も五つほど上で頼もしい兄のようで、いろんなことをよく知っている父親のようでもあったセフィルのことを嫌いになる理由などなかった。例えば毎晩、自分がアブルによって屈辱的な時間を過ごしていたとしても、その後セフィルが自分のそばにいてくれると、あの悪夢の一時が何もなく終わったかのようにも感じられるくらい記憶の中から遠くなり、セフィルという瞬間だけに浸れることが出来たから。

その感情を“愛”と認識するようになるまで、さほど時間はかからなかった。セフィルのことを愛しいと思えば思うほど、エルはアブルからのそれを我慢できなくなり、アブルはそのエルの反応を楽しんでいたが、日に日に酷くなるエルの反抗心にいつしか苛立ちを覚え、アブルのエルに対する偏った愛情はエルの唯一の拠り所に牙を向くようになっていった。

アブルは考えた。

どうすればエルを我が物だけにすることが出来るかを。

エルの全てを我が手中に収めたいと目論んでいたアブルは、エルの

感情すらも我が物にしたいくてたまらなかった。エルの感情の全てがセフィルに向けられているのは、アブルもよくわかっていた。しかし、今まではその感情の度合いが、同居人という枠だけのものだと思っていたのだが、ついにその枠を超えて、エルにとって重要な存在にまで発展していることに気がついてしまった。

エルの全てが欲しい。

エルの何もかもを自由に扱いたい。

セフィルは、アブルの家から出ることを考えていた。しかし、アブルには貸しがあり、今までの貸しを全て返金してからでないと、到底自分に自由はない。今の仕事で稼いだ資金は、全てアブルへ持つていかれ、手元には殆ど残らない。かといって、逃げたとしても行く充てもなく、もちろん家に住むことも出来ない。ましてや、エルを連れて出て行くなど、夢のまた夢である。

どうすればいいのか、袋小路に陥ったセフィルを救ったのは、行商のある男だった。

その名は、アルセダ。

アルセダは、セフィルが昼間、ある場所で腰をかけ、考え事をしているときに声をかけてきた男だった。景気がよく仕事を自分ひとりでは裁ききれないというアルセダは、自分の代わりに荷物を得意先の家に運ぶ仕事をする代わりに、アブルへの貸しを肩代わりしようということだった。セフィルは、すぐをお願いすることにした。セフィルとエルの分まで肩代わりしてくれるというのだから。アルセダは、早速アブルに話しをつけようと街へ消えていった。

アブルは、アルセダの話しを受け入れると、すぐにセフィルに自由を約束した。

しかし、アブルはこう言った。

「セフィール、お前はもう自由の身だ。好きなところへ行って、新しい人生を造りなさい。」

「ありがとうございます。アブル。今までのご恩は一生忘れません。今日はもう遅いので、エルもいますし、明日発ちます。」

「それはダメだ。」

「どういうことでしょうか？」

「もうアルセダがお前さんへの貸しをチャラにしてくれた。ということは、ここに置く理由はない。それとも何か？またわしに貸しを作る気でもあるのか？」

「いや、そういうわけでは……。あのエルもいますので、もう一晩だけで結構です。」

「エルは、わしと共にいる。」

「なぜですか？エルの貸しもアルセダが」

「エルはのお、アルセダが肩代わり出来るほど貸しが安くないんじゃないよ。少なくとも金貨四枚は必要じゃ。あやつには、たくさん使ったからなあ。」

「そ、そんな……。」

「セフィール」

「アルセダ」

「さていくとするか。」

「どこへですか？」

「仕事だよ。アブルへの貸しは安くなかったんだ。その肩代わりした分、きちんと返してもらおうよ。」

「わかってます。でも仕事は明日からのはず。」

「何を言ってるんだ。今から準備しないと間に合わないだろ。さあ、いくぞ。運搬は明日の朝からやってもらう。」

セフィルは、後ろ髪を引かれる思いでアブルの家を後にした。その後、すぐにセフィルが出て行ったことを知ったエルは、裏切られた気持ちでいっぱいになり、自分の存在価値すらわからず、毎夜のアブルとの事も自然と受け入れるようになり、エルは完全に正気を失った。

滅多に降らない雨の中、僕はこの街のメインストリートに立っていた。不思議だけど、雨に濡れない。透明人間だからなのかもしれない。

この体になると、思った場所に一瞬で行くことが出来るし、誰がどんなことを思っているのかも、その人物に意識をあわせるだけで、まるで自分のことのように鮮明に、かつリアルに感じる事が出来る。そして時間が感じられない。さっきまで朝だったのに、いつの間にか夜になってるし、さっきまで子供だったエルが、いつの間にか大人っぽくなってるし、気がついたらアブルは死んでるし。

誰にかに殺されたらしいけど、気持ち悪いから考えないようにした。だって深く考えると、その瞬間がよくわかってしまうから、きっと気持ち悪いだけじゃ治まらないよ。

でも道行く人の会話をたまたま耳にしたら、アブルは、背後から誰かに刺されたって・・・。

それで腕にも鋭い刃物で切られたような傷が一本あったそうだ。

雨脚が強まった。風が横から雨を煽るから台風のように物凄いエネルギーが僕を包んだ。透明人間だから関係ないんだけど、つい目を瞑ってしまうのは何故だろう。

霧が少し出ているからよくは確認出来ないが、少し先に黒い何かをかぶった人影が見えてきた。雨の中、ゆっくりと一足一足かみしめるように歩いている。下を向きながら頭の先で雨を受けながらゆっ

くりと・・・顔は、無精ひげを生やして、少し痩せこけている。紛れもなくそれは、セフィルだった。袖から見える手もかつてのような力強さはなく、日々の労働に体力を奪われてしまったのだろうか、あのゆらゆら歩きがそう思わせてならない。僕は、セフィルに意識をあわせてみた。

“俺の人生はいったい何なんだ”

“両親がいなくなり、十三歳でアブルの元へやってきてから、ずっと働き続け、心の拠り所でもあったエルを自らの無知のせい・・・”

“楽になるはずだった環境も貸しを作った相手がアブルからアルセダに変わっただけで、毎日働き続けるのには変わりはなく、アブルの元で働いていたときよりも重労働になってしまった”

“俺は、何のために生まれてきたのか”

“俺なんて、必要ないんじゃないのか？”

心臓の鼓動がどくどくと勢いよく鳴り響く。自分のことのように感じるセフィルの気持ち。

これは意識をあわせたからだろうか。

“いや、違う”

僕もいつも思っていたことをセフィルも感じていたから共感できたんだ。きっと。

僕らも毎日のように勉強、勉強で朝から学校に行き、びっしり六時間目まで授業を受ける。習うことと言ったら社会に必要なのか疑問に思うことばかりだ。テストも暗記が得意なやつほどいい点数を取るような仕組みだし、塾に行けば、口癖のように講師が“偏差値の

高い学校に”とランク上位校に入学することで人生の全てが左右されるような言い回しをする。家でだって、将来の話しをすれば、“どんな職業について何をするか、定年までやっていける仕事を早く見つける”が父の口癖だし、人間は老いを迎えるまで働き続けないといけないものなのか。それが人間が幸せだと思うことなんだろうか。

誕生 ↓ 学校 ↓ 仕事 ↓ 定年 ↓ 死

僕はこんな生活、こんな一生なんていやだ。絶対に。だから、セフィルの考えていることを、僕は手に取るように理解できた。考えが一緒なんだ。

彼と僕の違いといえばそれは、僕には両親がまだ健在で雨風しのげる家に住めて、生活にも不自由していないということ。

セフィル、あなたはきっと不要な存在なんかではない。だってエルにはあなたが生きがいだっただから。

地面が雨でぐちゃぐちゃと音がする。

泥水が足を濡らす。

水溜りが今のセフィルの顔を鈍く映し出す。

水溜りを覗き込むようにして、前かがみになる。

鈍い感覚が背中を伝ったと感じたときには、水溜りに全身が浸かる瞬間だった。

体に力が入らない。微かに指先だけが動くが、顔もあげられない。目は、泥の地面を見つめ続けて、無常にも雨は強さを増していった。意識段々と遠のいていく中で、セフィルは思った。

“俺の人生・・・なんだたんだ・・・”

僕の目の前で一人の若い男が死んでいった。

背中に大きなナイフを刺したまま、強い雨に打たれながら、泥の水溜りに全身を濡らし。

男の最後を呆然と見つめる一人の姿が、僕の目から離れない。脳裏から消すことが出来ない。

その目は、冷たく、ずっと同じ方向を見つめたまま……。

そして、ゆっくりと地面にひれ伏した男に近づくと、ドサツと脇に倒れた。

泥水がみるみるうちに、赤く染まっていく。

遠のいていく意識の中で、きっと満足しているのだろうと僕は思った。

自分の最愛の人と最後は、一緒にいられたんだから。

ぶるっと寒気がして目が覚めた。

毛布も何も掛けずに昼寝をしてしまったから、少し喉に痛みを感じる。

台所では、母が料理を始めるところだった。今何時だろう？

「早かったね」

「いつもと同じよ。あんたよく寝てたみたいね。」

「今何時？」

「もう十七時半よ。」

「え。そんなに？」

「最近勉強しすぎて疲れたんじゃないの？大丈夫？」

「なんとか。」

「今日は、勉強しないでいいわよ。」

「どうして？いつもはあんなにうるさく言うのに」

「お客さんがきてるの」

「お客さん？」

「ほら、そこ」

母が指をさした先には、座り込んでモンスター狩りをするゲームに夢中になっている睦の姿があった。

「睦」

「今日は、うちにお泊りよ」

「どして？」

「睦くんのおじいちゃんが倒れちゃって、今日はお父さんとお母さんが急に田舎に帰ることになったのよ。だから、一晩うちで預かることになったの。あんたの部屋で一緒に寝てもらうから、頼むわよ。」

「わかった。」

「よろしくね。お兄ちゃん。」

テレビ画面を見ながら、挨拶をするとは何とも礼儀知らずなやつ。

僕は、返事をしなかった。夢の中のことが頭から離れなずまだ本調子になれない。

つっけんどんな態度に睦はまた慌てて、僕に抱きついた。

両手は僕の腰らへんでぎゅっと握り締めて、左耳を僕のお腹らへんにつけた。

「心臓の音・聞こえる。」

僕は、いつもよりきつく睦を抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8895p/>

14121

2011年1月9日02時14分発行